

五十字劇評NO.73

言わせて！

今日の芝居

Nana Produce 其の女

【20代】

▼「その類、熱線に焼かれ」の弘子とは別人のようで戸惑いました。ケロイド治療で心境の変化はあれど、今までの苦労や悲しみの弘子の想いや経験といった弘子の根幹が抜けた、不自然な明るさしか伝わって来きませんでした。いくら親しい人に見せる姿であっても、歳を重ねても、人間はそう簡単には変わらないのでは。魅せる側面を間違えている気がしてなりません。演出・制作側の意向なのでしょう…。台本を文字で読んだ時のほうが面白かったと感じてしまいました。弘子の心情、時代背景、セリフはないけれどそこに居る相手の会話が見え、一緒に人生を辿

【40代】

ることが出来ました。自分の中で大切にした言葉も気持ちも多くありました。弘子ではなく、渋谷はるかという役者の魅力を伝えたかったのですね。もちろんそれが悪いわけではありませんが、今回はそれもハマっていない印象を受けました。しかし、一人芝居を作ろうという劇団・役者の熱量は尊敬しています。また次の芝居を楽しみにしています。(女性)

【50代】

▼前作では見られなかった素の弘子がそこにいた。普通の、どこにでもいそうな明るい女性だった。原爆の影響、差別について、考え続けなければならぬ。(男性)

▼「その類、熱線に焼かれ」の弘子さんのその後。どう生きていったのかと観劇。キツイ感じだった弘子さんが、治療し、帰国しても残るケロイドに苦労はしても結婚・出産・子育てと経験し、幸せを感じることが出来たいたことはうれしく感じた。一人だけど、相手もきちんと感じられた芝居でした。(女性)

▼渋谷はるかさんの演技力がすごいと思った。一人芝居なのに他にも役者がいるような感覚でした。(女性)

【60代】

▼「其の」とは何か。ひとりの中にあるつつ、世間という枠で縛られる。母と息子の、狭く広い物語に集約。納得。(女性)

▼熱演に圧倒された。理不尽で辛く哀しい、抗えない運命を思った。幕切れの「おかえり、ヒロシ」の一言に救われた。(男性)

▼被爆者というより一人の女の一生という普遍性を感じた。危惧した緩慢さもなく、一人芝居とは思えない見事な舞台だった。(男性)

【70代】

▼顔に小さな吹出物が出て気がかりなのに得体の知れぬケロイドを負った恐怖。絶叫せず静かに伝えた芝居。(女性)

▼過去2例会の一人芝居は感動した記憶が強く残っているので今回どんな一人芝居が楽しみにしていました。始まりからびっくり「弘子さん」

ひとりのはずが記者や夫などの出入りする玄関の開く音・暖簾の開き具合がタイミングよく演出され、あれ一人芝居ではないのかと勘違いしそうでした。「弘子さん」が数人の人を

演じていて感動でしたが、場面によつては声が聞きづらいところがありました。私、私の年のせいでしょうか。(女性)

【80代】

▼はじめて一人芝居を観た。たった1人で演じ切った「渋谷はるか」さんから、感激・感動・感得の3感をいただいた。名演技をありがとう！(男性)



【性別・年代未記入】

▼原爆乙女なんて誰がつけたかマスコミは残酷だ。肌に刻み込まれたケロイドを治す名目で米国につれていかれ、アメリカはその原爆の「その結果」が知りたかったのだらう。彼女達のその後は、ずっと大変だった。アメリカいいなりの日本は今も続いている。

▼一人芝居なのに、相手もいるように感じました。弘子さんの息子への気持ちに、ホロっとしました。舞台装置もすばしかったです。



事務局に届いた「はがき」より

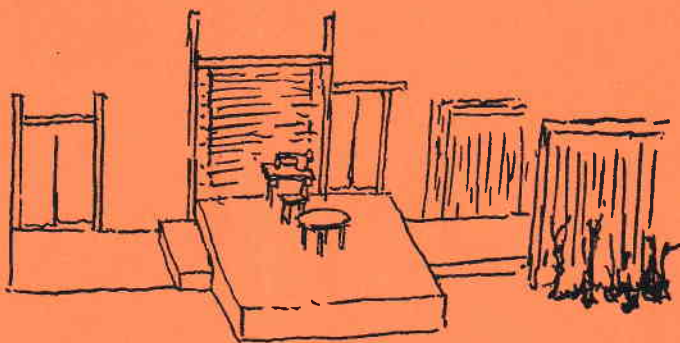
▼芝居を観つづけるために一言申し上げたい。『其の女』の観劇の際の出来事。残念ですが、携帯電話の着信音2回、およびメール？音数回鳴った。(すでにご存じだと思います)

残念でならない。演者にとっては無頼の衝撃を受けたことと思います。

演者は何もなかったかの様に芝居をつづけていましたが、もう旭川に来たくない”と感じられたのではないかと推察します。加えて、昼の部においても本格的な居眠り(イビキ)をされてた方がおられたと聞きました。周りで注意されても退去することなく、再びイビキ。

回りの観客は、その出来事で芝居に集中することが不可となり、一緒に芝居を作る市民劇場本来の姿勢がくずれ。少しづつ会員が増えていく中で残念でなりません。結果として会員減(楽しくない)の要因につながらなければよいがなと心配する会員でした。(乱文乱筆ですみません)

水道の会会員より



編集スタッフから

元ネタとなった舞台『その頬、熱線に焼かれ』(on7)は旭川初の古川作・日澤演出であり、劇団の枠を超えた女優たちの独自企画でした。しかし被爆という題材の重さから、私にとっては少々辛い鑑賞時間を過ごしたように思います。

その後日談となる『其の女』。しかも一人芝居ということとどんな舞台になるかと覚悟して鑑賞しましたが、それは全くの杞憂に終わりました。原爆少女という特殊な境遇を鑑みずとも、普遍的な女性の物語になっており、最後まで飽きずに鑑賞することができました。のれんがひとりでに開いたり、卓袱台のコップの麦茶が少しづつ減ってゆくさりげない演出にも感心しました。

劇団チヨコレートケーキ・コンビの懐の深さをまたも感じさせてくれた10月例会。来年の8月例会『同盟通信』も益々楽しみです。